

# コロナだからできた！みんなが笑顔の運動会 ～私たちの運動会レボリューション～

千曲市立八幡小学校 宮坂 久美子

## 1 研究のテーマ

新型コロナウイルス感染症対応の中、つながりを大切にしながら、みんなが笑顔になるような新しい運動会をどのようにつくっていけばよいか。

## 2 ねらい

本校は千曲市の西側に位置し、日本遺産になった棚田や千曲川が近くにある自然豊かな環境に囲まれている学校である。近年の少子化により、本年度はすべての学年が単級となった。学校目標「心ゆたかに たくましく生きる 子ども」の実現のために、今年度は、「つなげる・つながる八幡っ子」を重点にした教育活動を計画した。

ところが、新年度が始まって早々の臨時休業、その後もマスクをつけ、距離をとる生活になり、「つなげる・つながる」が難しい状況になってしまった。

そのような中ではあったが、9月19日に計画されていた運動会については、新型コロナウイルス感染防止の対策をしながらも、子どもたちのつながりを大切に、子どもたちが笑顔になる行事にすることをねらい、取り組み始めた。

## 3 経過と内容

### 1 つなげる・つながる八幡っ子

単級の学校では、担任一人の考えで学級経営が行われる傾向にあり、閉鎖的な「学級王国」になる恐れがある。子どもたちが多様化している現代、学年や学級の垣根を取り払い、複数の目で子どもたちを育てていく必要があるのではないかと考えた。「つなげる・つながる八幡っ子」を目指し、次のような教育活動を計画した。

#### (1) 連学年単位でつながる

今年度は、連学年単位で、清掃、体育の授業、授業交換、学年集会などを行ってきた。他学年と一緒に取り組む清掃では学年ごとに行っていた昨年度に比べる

と、清掃の態度が向上している。また、連学年体育は1つの授業を2～4名の教職員で指導でき、他学年に刺激を受けながら学ぶことができています。連学年体育は、運動会に向けても大事な取り組みとなる。

#### (2) ティームティーチングや少人数学習でつながる

算数を中心に、小人数学習やティームティーチングで、担任以外の教職員が指導・支援にあたることのできる体制を作っている。個別指導を行う場面を増やすことができています。

#### (3) 縦割り活動でつながる

登校班でのつながり、児童会なかよしグループでのつながりを大切にしている。月1～2回の児童集会は、コロナの今年度、全校が集まる貴重な場面であった。その場でのなかよしグループ活動は、運動会を大きく改革するきっかけとなった。

当初、新型コロナウイルス感染防止のため、「つながる」ことが難しいと考えていたが、工夫をしながら行うことで、新しいつながりの様態が見えてきた。そして、その新しいつながりが運動会に結び付いていく。

## 2 どうする！？運動会

臨時休業が終わり、通常登校になったのは6月1日であった。このころ、1学期のほとんどの行事は中止か延期、2学期に予定されている運動会も開催できるのか検討しなければならなかった。

しかし、運動会は屋外の行事であること、本校の規模（児童数約200名、広い校庭）であれば全校が集まって行う運動会は可能であると判断し、内容の検討に入っていた。

#### (1) どんな運動会にするか

今年の運動会のねらいについて、係から「運動会を地域や保護者の方々に見ていただく特別な場としてでなく、体育の授業の延長としてとらえたい。個人や集団の競技や演技で、運動する側と見る側の両者の視点から楽しめる運動会を目指したい。新型

コロナウイルス感染拡大防止の中でも、達成感を味わえるような場にしたい。」と提案があった。

7月8日の基本計画案では、

- ・午前だけの半日開催にし、時間短縮する。
- ・走の運動は、従来のように実施できる。
- ・表現（ダンス）は実施できるが、組む体操は不可。
- ・全校種目はラジオ体操・全校ダンス。大玉送りはしない。
- ・運動会特別時間割は行わない。練習時間も長くしない。
- ・応援・選抜リレーは、なし。
- ・児童の係活動なし。

が了承され、連学年種目や開閉会式の方法については検討することとなった。

この中には、今までも課題があって検討してきたが、変えられずにきていたものがある。変革のチャンスがやってきたのだ。

### ①半日開催

これまでは、昼食をはさみ、午後まで運動会を行っていた。しかし、近年暑さが厳しいことや種目の精選を行う中で今年は半日開催にすることを考えていたが、コロナ対策で、あっさり実現した。

### ②選抜リレーをやめる

運動会の花形種目とも言われる選抜選手によるリレー。確かに当日は盛り上がるが、

- ・選抜をすることの是非
- ・始業前の練習の負担（児童と教職員）
- ・選ばれない子や保護者の思い

などの課題は以前からあった。しかし、リレーへの児童や保護者の期待から、やめることに踏み切れなかったのだが、今年、行わないことにした。

### ③組体操をやめる

組体操は、子どもたちがこの種目を通して学ぶことが多いということで、長いこと大事にしてきた種目である。しかし、実は子どもたちというより、教員や保護者のやりたい、やってほしいという願いの方が強かったのではないかと思う。近年、組体操の危険がクローズアップされてきたが、ピラミッドや塔といった種目を入れた演技はなくならなかった。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、「身体を組む運動」ができないので、今年度は、「組む」演技を行わない内容で考えていかざるを得ず、危険を伴う

技を行わない演技内容にする方向へ舵をきることができた。

## (2)運動会レポリレーション動き出す

運動会についての検討は、1学期から徐々に進めてきたが、「新しい運動会を作ろう」と考えるようになったきっかけは、児童集会での出来事であった。

### ①YAWATAレポリレーション

6月25日、今年度初めての児童集会が行われた。1～6年生の縦割りなかよしグループの顔合わせである。ここで、6年生が自分たちで歌詞や振り付けを考えた「YAWATAレポリレーション」というダンスを披露した。かつて流行ったディスコミュージックの「ジギスカン」の曲に乗せたダンスである。5年生以下の子どもたちも、見様見真似で踊っている。せっかく6年生が作ったこのダンス、「これ、運動会でやったらどう？」と提案すると、6年生は大喜びで了承。今までの「校歌ダンス」の代わりに、「YAWATAレポリレーション」。なんだか、新しい扉を開くことができそうな気がしてきた。



YAWATAレポリレーション初披露（6月）

### ②団体種目からなかよしグループ種目へ

これまでやってきた玉入れ、綱引き、台風の目、騎馬帽子取りなどの団体種目をどうするか、密にならないようにするにはどうしたらいいかを考えたが、当初、なかなかいい案が出てこなかった。

そこで、縦割りのなかよしグループでの種目として、検討を始め、1年から6年までが参加してできる種目を、教職員と子どもたちで考えてみようということになった。

その結果、「玉入れ」「大玉運び」「台風の目」の3つの種目が決めだされてきた。なかよしグループは、赤・黄・青・緑に分かれていたので、その色を利用して色別対抗を取り入れた内容を考えた。

このなかよしグループ競技では、高学年がグループをまとめ、1年生から6年生が協力しながら楽しむ

ことが期待できた。

### ③赤白対抗をやめる

運動会は、全校を赤白に分け、得点種目で点数を重ね、最後にどちらが勝ったかを発表するのが当たり前であった。勝ち負けや順位があれば、力も入るし、応援も熱を帯びる。しかし、なかよしグループ種目を考える中で、赤白対抗をやめてもよいのではないかと考えるようになった。

短距離走でも、なかよしグループ種目でも順位はつくが、それを点数にしていくことはやめることにした。熱気は帯びないかもしれないが、和気あいあいとした運動会になりそうである。

### ④座席も、入場もなかよしグループで

運動会の開会式に向けての児童の入場行進、座席割も、学年ごとではなく、なかよしグループ単位で行うことにした。並ぶときも、座席での応援も、教員の指示ではなく高学年が低学年をリードする場面を期待して計画を作成した。

このように、運動会全体を勝ち負けよりも、互いのつながりを大事にした内容で行うことで、固まってきた。

## 2 練習が始まった

### (1) 残暑の中、練習開始

2学期が始まり、運動会に向けての動きが本格化した。今年の残暑は厳しく、長く、体育館や校庭で練習する時間も制限せざるを得ない状況であり、朝から2時間目くらいで練習をするのが精いっぱいであった。しかし、綱引きや大玉送り、リレー、応援がなかったため、今までより時間をかけずに行うことができた。その分、各学年では、連学年による「表現」種目に集中して練習を行うことができた。

### (2) 試行錯誤のなかよしグループ競技

なかよしグループ競技については、3種目の実施



大玉ころがしをやってみる

案が係から出された。しかし内容を見ると、まだ問題点がある。初めての試みでもあるので、実際にやってみて実施方法を改善していくことにした。修正しながら練習を重ねる中で、子どもたちも競技に慣れていった。また、グループごとの話し合いの場面も設け、グループのつながりを意識させることができるようにした。

### (3) 組体操もレボリューション

6年生担任は、1学期から今年の運動会の組体操のプランを練っていた。しかし、身体を組むことができないため、プランは1から作り直さなければならなくなった。これまで行ってきた組体操の中でも、「一人技」は行える。そのあとをどんな表現内容で作っていくかを考え、旗を使ったフラッグパフォーマンスを行うことでプランが固まってきた。

今まで何回も組体操の指導をしてきた担任も、初めての経験である。だからこそ、練習をしていく中で、子どもたちの動きを見ながら試行錯誤を繰り返した。教師からの一方的な指導ではなく、子どもたちの意見も取り入れながら、演技を作り上げていった。



5・6年生 旗を使っての練習

### (4) 縦割りのよさが見えてくる

入場行進、なかよしグループ競技、全校ダンスは、なかよしグループ単位で行うので、子どもたちは担任の指示でなく、担当職員や5・6年生のリードで動くことになる。だんだん、6年生が声をかけ、低学年を集めたり、並ばせたり、後ろを振り返って様子を見たりする姿が出てきた。縦割りのよさが見えてきた。

## 3 そして迎えた新しい運動会

9月19日土曜日、運動会当日の朝である。残暑から一転、くもりで肌寒ささえ感じる日となった。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、保護者の見学数を制限する学校も多かったが、「家族」は見学OK

としたので、祖父母の皆さんの姿も多かった。

いよいよ運動会が始まる。

### (1) 6年生の思いを伝える

開会式は、なかよしグループごとに並んで行われた。子どもたち、ご家族の皆さんを前に、校長から次のようにあいさつをした。

休校から始まった今年度、新しい生活様式でやってきました。運動会ができるかわからない時期もありましたが、今日、このように全校で運動会ができることをうれしく思います。

6年生のある女の子が書いた日記を紹介します。

「私は、コロナだからこそみんなのできることをしたいのです。コロナだから何もできないのではなく、コロナだからこそできることがないかなと考えました。みんなが楽しかった、後悔なし、と思えて、最後はみんなの笑顔が絶えない運動会になってほしいです。」

コロナがあったから、今年の新しい運動会があります。勝ち負けに燃えるより、自分の全力を出し、たがいにつながり、支え合い、笑顔がいっぱいになる運動会にしたいのです。

八幡小学校の皆さんなら、きっとできると思います。

### (2) 自分の精一杯で走る

1・2年生のかけっこが始まった。直線を思い切り走る。ゴールには例年のようにカメラを構えた保護者の方がたくさんいらっしゃった。3・4年生は、円を走るリレーである。体育の授業の延長上で行われた競技である。5・6年生は、トラックをほぼ1周。それぞれ順位はついたが、1人1人が自分の精一杯を出して走る姿があった。

### (3) 笑顔で楽しんだなかよしグループ競技

なかよしグループ競技は、色ごとの4チーム対抗で行われた。6年生が先頭になって入場し、競技を行う。楽しそうな笑顔をたくさん見ることができた。



### (4) ひとりひとりが光った表現種目

連学年での練習を重ねてきた表現種目は、教員も子どもたちも気合が入り、どの学年も素晴らしい内容であった。1・2年生は、「紅蓮華」の曲に乗せて体いっぱい使ったかわいらしい演技。3・4年生は、毎年恒例の「八幡ソーラン」で、力強い表現を披露した。

5・6年生は、フラッグパフォーマンスを主とした「心をひとつに！輝け笑顔のにじ」。姿勢、目線、メリハリの効いた動きは見事だった。



### (5) YAWATA レボリューション

今年の新しい運動会をつくるきっかけとなったYAWATAレボリューション。なかよしグループで輪を作り、2回踊った。6年生が式台の上でリードする。最後にみんなで、「や・わ・た！」と声を出し、ダンスを締めくくった。

運動会のすべてが終わったとき、時刻は11時15分。子どもたちも、職員も例年のように疲れ切ってしまうこともなく、穏やかな表情であった。あるご家族の方からは「いい運動会でしたね。」と声をかけていただくことができた。半日開催でも、十分満足できる運動会になった。新しい運動会は成功した。

## 4 今年の運動会で得たもの

### (1) 子どもや保護者の声

運動会後、子どもたちや保護者から感想が届いた。その中から、新しい運動会に関するものを紹介する。

- ・なかよしグループでやったのが楽しかった。他のもやってみたい。(1年生)
- ・勝ち負けなしの運動会だったので、1人1人がみんながんばったと思います。勝ち負けなしの心を学び

ました。(4年生)

- ・なかよしグループでやったので、いろいろな人となかよくなりました。大玉転がしで一緒に運んだり、座席で一緒に話したりしたので、同じ学年だけでなく、他の学年とも仲良くなれた気がします。(6年)
- ・コロナに負けず、みんな一緒に頑張ろうという強い気持ちで心をひとつにできた。(6年)
- ・なかよしグループのリーダーになって、先頭を2回も走って、1年生とかにいいことをしたと思う。この経験は絶対生かせる。(6年)
- ・コロナの中での開催、大変だったと思いますが、皆がとてもよく頑張っている姿を見て、感激でした。楽しそうに演技や競技ができました。楽しくできるように先生方が工夫してくださったことに感謝です。(1年生保護者)
- ・今までの運動会と全く違ったけれど、とても素晴らしい運動会だったと思います。一番盛り上がるリレーがなかったのは残念だったけれど、1人技からの旗を使った表現は本当にみんなビシッとそろっていて感動しました。(6年生保護者)
- ・グループごとの種目で下級生にやさしく接している姿をあちこちで目にしたときは、うれしくなりました。(6年生保護者)



1～6年生で行った玉入れ

## (2) 連学年の力

連学年で短距離走や表現種目を行ったことで、複数の教職員が協力して指導に当たることができた。子どもたちも異学年と一緒に学ぶことで、刺激を受けながら練習をすることができた。年度当初に大切に考えた複数の目で子どもを育てる場面となった。

## (3) 自己有用感が高まる

今年の運動会は、準備などは教職員が行い、児童の「係活動」はほとんど行わなかった。例年の係活動を振り返ってみると、係の先生の指示通りに動くことを求めているように思う。子どもたちは仕事をしている

ように見えたが、実はやらされていた部分が大きかったのではないだろうか。



今回の運動会はなかよしグループを基本単位で行ったことで、特に5・6年生の自己有用感を高める場面となった。1年生に声をかける、先頭を歩く、走る、それだけでも自分が役に立っているということを実感できた子が多かった。また、これまでの運動会では座席での児童指導に教員が苦心していたが、なかよしグループごとの座席にしたことで、座席での自治が行われた。これも高学年児童の力であった。

## (4) 特別支援学級の子もたちも笑顔に

自・情障学級の6年生児童は、練習からなかなか参加することができなかった。ある日、なかよしグループの玉入れの練習を見て、「これなら自分にもできそう。」と、参加する意欲を見せた。当日も参加し、楽しそうに玉入れ競技を行った。

また、同じ学級の3年生児童の保護者からは次のような感想をいただいた。

・今年は例年の運動会と様子が違ったので、どうなることかと心配していましたが、「運動会絶対見に来てよね。楽しみだなあ。」と運動会を楽しみにしていました。先生方が支援して温かく見守ってくださったおかげもあって、運動会も無事にできたのだと思います。

特別支援学級の子もたちは勝ち負けにこだわる傾向があり、それが気持ちの不安定になることがあった。今年のように勝ち負けの色合いを減らし、連学年やなかよしグループの中に自分を置くことで、心地よく運動会ができたと考えている。

## (5) 組体操でなくてもいい

これまで、けがの危険性をはらみながらも、やめられなかった組体操。しかし今回の5・6年生の表現は「組体操」以上に一人一人が輝く姿を見ることができるようになっていた。教員の「組体操でなければ」といった考え、保護者の「組体操を見たい」という思い

を取り払うことができたと思う。また、練習中のけががほとんどなく、安全性が高かったことも収穫であった。

### (6) 子ども発のダンスを全校で

伝統的な校歌ダンスを、6年生が作ったダンスに変えたことで、新しい運動会を作っていた。子どもたちの力を全校の種目に反映させることができたことは、まさにレボリューションだった。

### (7) 教職員みんながつながった！

今年の体育主任は、小学校勤務2年目で体育主任を初めて務める教員である。今年度の運動会を実施するまでに、中心となって推進した。彼が小学校の運動会の当たり前にとらわれず、柔軟な考えができる若い職員だったことも運動会成功の要因だと思っている。運動会後の職員の感想には、次のようなものがあった。



- ・初めての形で、見通しが立ちにくい場面もあったが、その都度、係の先生からのプリントが出され、一つ一つのことに先生方が相談しながら対処し、完成形の見えない中をみんなで築き上げているんだと思った。
- ・コロナ対策を前提に、本当にいろいろ工夫してみんな笑顔で終われることができてよかった。八幡の子どもたちの対応力、適応力、柔軟に考える力も育まれたと思う。今後、生き抜くためのとても大切な力を学校全体が一つとなることで、ひとりひとり身につけられた運動会だったと思う。
- ・どんな状況でも諦めず、知恵を出し合い、何とか作り上げようとする八幡の先生方の姿に感動した。
- ・運動会の全体像が見えたところから、職員のチームワークが高まっていったと思う。そのことにより、先生方が自信を持って指導することで、子どもたちも今までにない自分の可能性に挑戦する姿を見せた。

教職員もつながったことも大きな原動力となり、学校目標「心ゆたかに たくましく生きる 子ども」を育むことができた運動会になった。

## 4 来年度に向けて

今年の運動会を終え、来年度からも同様の運動会にしていきたいと考えている。職員からは

- ・リレーを見てみたい。
- ・新しいダンスでなく従来の校歌ダンスで負担を少なくしてもよい。
- ・チーム一丸となってがんばれる種目がもう少しあってもよい。
- ・運動会なのか、体育学習発表会なのかの色をはっきりさせて取り組みたい。

などの意見も出ている。今年度の運動会をベースに改善を加えてみたい。

また、児童会と連携しての推進を位置付け、子どもたちからの提案や意見も取り入れていくことも大切にしたい。

保護者は今年は「コロナだから」これまでと違った運動会をやったのであって、また元に戻るものと思っているかもしれない。今年の運動会の成果を伝え、運動会で何をねらうのかをはっきりさせていく必要がある。

## 5 まとめ

新型コロナウイルス感染症防止対策の中の学校は、様々な制約があり、できなくなってしまったことが少なくない。しかし、どうしたらできるのかを探って、新しい形で行っている教育活動が多い。そして、その中でこれまでの当たり前や固まった考えを見直し、新しい考え方、新しい価値観を見つけることができていく。

もし、コロナがなかったら、今年の運動会の内容はこれまでと変わらなかっただろう。コロナだからこそ、運動会を改革できた。コロナだったから、笑顔の運動会になった。

私たちの運動会レボリューション。